

武州鉢形城

井伏鱒二著

武州鉢形城

井伏鱒二



新潮社



©Printed in Japan. 1963

武州鉢形城

昭和三十八年三月二十六日印刷
昭和三十八年三月三十日発行

定価三〇〇円

著者 井伏鱒二

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
東京四三二九番地 東京 808

印刷 大日本印刷株式会社

製本 新宿加藤製本所

△落丁本はお取替えいたします△

目次

故篠原陸軍中尉……………五

武州鉢形城……………一九

装帧
吉岡
堅二

武州鉢形城

故篠原陸軍中尉

去年の春から中野の小田さんに「孫子評釈」と「日露戰役におけるコザック從軍記」を借りていた。早く返さなくてはと思いながら、ついそのままにしていたものである。それを今度、やがて旧曆のお盆だからというので返しに行くと、小田さんは虫干しを兼ねた大掃除を終わったばかりのところであつた。

「やあ、取りちかしてありますが、さあそれでは、こちらへどうぞ。」と小田さんは、客間の方へ私を案内した。「久しぶりに、虫干しをすると、いろんな物が出て来るもんだね。われら弱年の頃の思ひ出の品が出て来ましてね。感慨無量というやつですよ。ちよつとそれをお目にかけますかね。」

小田さんは立つて行つて巻物のようなものを持って来た。それは巻物のようなものと云うよりも、ちゃんと表具屋の仕立てた一つの巻物である。紐だけは虫に喰われて附根のところから切れている。ひろげて見ると、なぐり書きの若々しい筆蹟である。冒頭に忠君愛國を誓う文句が書いてある。それに続いて、「余は断乎として軍籍をしりぞき外国語学校露語科に入学せり。

臣下たる者の国に尽す豈に軍人のみならんや。捲土重来また期すべからず。」と書いてある。それに続いてまた、見るからに激越な文章で、「余は涙をのんで乃木閣下に（中略）しかれども閣下より蒙りたる鴻恩は夢寐の間も忘る能わず。乃木夫人に対する恩儀もまた然り。云々。」と云つてある。最後に「ドンに宜しく」と書いて、署名は「小笠原善平」となっている。宛名は「小田須美平君」で、小笠原という人が小田さんによこした手紙である。

私は小笠原善平という名前に聞き覚えがあるような氣持がした。小田さんはその巻物の文章を始めから終りまで改めて朗読し、

「小笠原善平というのは例の篠原良平ですよ。」と私の記憶を呼び起してくれた。「徳富蘆花の『寄生木』の主人公です。彼は幼年学校がわたしの一級上で、士官学校はわたしと同期。旭川の聯隊でも同じ士官候補生でした。我々は、同時に少尉に任官して、日露戦争に行つて来ると中尉になって、また旭川の聯隊で一緒です。この『ドンに宜しく』のドンは、やっぱり我々と同期の市野美保三です。」

市野美保三という軍人は、暢氣者で、のっそりしているのでドンという綽名であつたそうぞ。士官候補生時代には、市野、小笠原、小田の三人と、下士官出身の候補生と、もう一人、良家

の出の生まじめな候補生と官舎で同室していたそうだ。

「当時、小笠原は猥談の大家でしたよ。よく馬鹿なことを云って、みんなを笑わせたものでした。朝起きるとから猥談して、すると良家の出の候補生が顔を赤くする。それが可笑しいので、みんな腹を抱えて笑ったもんだ。実によく笑った。しかし下士官出身の候補生は、まじめ一方の人間で、しかし赤い顔なんかするのじゃない。人が笑っても知らん顔。彼も日露の戦で戦死したね。」

「この篠原良平の手紙、僕に筆記させてくれませんか。雑文原稿に書きたいですから。」

「いや、そりゃ困るんだ。これは小笠原善平が自殺する前によこした最後の手紙ですからね。うちの婆さんにも見せやせん。わたしはこれを、小笠原の位牌のつもりで中尉時代に表装さしたんですよ。貧乏少尉、やりくり中尉の中尉で金のないとき、表具屋に持って行って表装さした。これは門外不出です。」

「乃木さんに対して云々、といった気持を書いているからですか、それで門外不出ですか。」

「いや、ともかく小笠原は乃木閣下に対して、非常に感謝の念を持っておったな。しかし第三者に対して、また上官に対しても、自分が乃木閣下に恩顧を受けておるような言行は、微塵も

「見せなかったな。」

「すると、篠原良平の小笠原善平は自殺する前に、何か事件でもあって、乃木さんに対して何か含むところがあったんですか。」

「いや、彼は極めて短気でしたからね。あるいは乃木閣下に無断で軍籍を退いてしまつて、その後で小官は外国語学校に入りましたと報告に罷り出たかもしれんな。おそらく叱られたでしょうよ。それで閣下に大目玉をくらわされたんで、一時的にかつとなつたかもしれん。とにかく小笠原は誠実で正直で責任感の強かった人間ですが、そのときの気分次第で、つい云わなくてもいいことを云つてしまふ。兵隊をつかまえて、おい、お前はよい兵だ、上等兵にしてやろよ、なんて口に出す。そんなこと云っちゃいかん。彼は逆上すると、前後を忘れてしまふ。日露の戦のときも、奉天の先で、軍紀を破つた部下を斬つたことがありますからね。」

篠原良平が部下を斬つた事件のその場面のことは、私も中学生のとき「寄生木」で読んだのを思い出した。その他、まだ「寄生木」で私の記憶にあったのは、良平が初めて乃木將軍を訪ねて行つたときの場面と、間もなく台湾總督になった乃木將軍の副官にからかわれる場面である。

小田さんの話では、「寄生木」の篠原良平は、小田さんの知っている限り実在人物の小笠原善平そのままである。「寄生木」が出版されてから間もなく、蘆花が旭川聯隊の小田さんの官舎へ訪ねて来たが、蘆花は小笠原の書いた長大な手記を剪裁しただけだと云っていた。そのとき小田さんは中尉で、日曜日のことから図書室で本を読んでいると、従卒が慌しくやって来て、「訪問客であります。この名刺の人と、その奥さんのような人と、小さい令嬢のかたであります。」と云った。名刺を見ると徳富健次郎とある。当時、蘆花の文名は高かった。若い読者に大いに人気があった。「寄生木」を読まない女学生は、女学生の恥だとされていたくらいである。小田さんが急いで官舎へ帰ってみると、入口に人力車が三台とまっている。玄関に黒眼鏡をかけた蘆花と、夫人と、養女が立っていた。「おあがりなさい。」と云ったが、座蒲団もないから毛布を敷いてお茶を出した。茶のみ茶碗は、二つしかないから飯茶碗で員数を補充した。

蘆花は先ず第一番にこう云った。

「わたしは北海道に来た目的は、原始林がなくなっていくのでそれを見るためです。それから、あなたをお訪ねしたのは、小笠原善平の手記のなかに、あなたの名前が到るところに煩いほど

たくさん出て来るので、あなたにお逢いしたいというのが目的です。小笠原はあなたに対して非常に感謝の気持で書いていましたが、あの原稿を小説の形にするために、あなたのことを書いてある部分は、殆どみんな削除しました。小笠原は何冊も小型のノートに小さな字で書いていましたが、積み重ねるとこのくらいの高さでした。」

坐っている人間の頭と殆ど同じ高さに蘆花は手をあげた。

当時、小田さんは陸軍大学校の入学試験準備をやっていた。蘆花にその話をする、蘆花は気の抜けたように「ほほう、陸軍大学校ですか。」と云って、問わず語りにトルストイや社会主義の話をした。しかし蘆花のところに出入りした篠原良平と違って、小田さんは日露戦争後のことだし、行く行くは参謀になるつもりだから気を悪くした。ロシヤが今に復讐戦を仕向けて来ると勢いこんでいた当時のことである。

このときの蘆花との談話について、小田さんは後年、某雑誌記者との対談で次のように云っている。「篠原良平に関する小田須美平氏の談話」という速記録を抜萃する。

記者——それから小田さんにお伺いしますが、篠原良平の妹さんは、篠原良平が自殺してか

ら後に乃木將軍のところへ女中奉公したというのは本当ですか。

小田——いや、そんなことはない。それは間違いです。誤報でしょう。蘆花が旭川聯隊のわたしの官舎へ訪ねて来たとき、さっきの妹さんの話が出て、「謝恩の意味で、妹さんを乃木さんのところへお礼奉公にやっただけがです。」と、わたしに云った。なるほど篠原良平の小笠原善平は、乃木さんに拾いあげられたようなもので、乃木さんのうちの書生をしていたのですが、それから幼年学校時代に月謝を出してもらい、台湾にも連れて行ってもらい、奥さんからも母堂からも可愛がられ、小笠原は乃木さんから恩義にあずかったので、謝恩しなくては相すまんということに非常に心を傾けておった。しかも恩義に対して自分は裏切りをしたと、小笠原は苦しんでおった。云いなおせば、恩を着たばかりに非常に苦しい晩年であつた。わたしはそれで蘆花先生に云ったんです。

「小笠原は恩義にはさまれて、情誼の重みに耐えかね……。それを万策尽きて最後に死をもつて謝恩に代えたんです。病み呆けた犬のようにふらふら故郷の山口村に帰って、父親や実兄の目を反らしておいて、蒲団をかぶって短銃でここを（眉間のところを指差し）撃ち抜きました。ですから、もうそこまで妹さんに勤めさせなくてもいいでしょう。妹さんも婚期を

半ば逃がしかけています。わたしは同意できません。わたしは小笠原が気持のうちでは御恩返しをしていると掬みとってやりたいです。地下に眠っても乃木さんの御恩は忘れないと思ひながら自決したでしょう。それはそれで宜しいです。妹さんにまで御礼奉公させるということになると可哀そうな気がするし、小笠原の本意じゃないだろうと思いますから。」と、はつきり云った。蘆花先生は「そうですか、そうですか。」と二三度くりかえしていた。

記者——御礼奉公なんて云うのは、社会主義的なことなんですかね。トルストイも、そんなの書いていませんですね。すると蘆花が、篠原良平の妹さんを、乃木さんのところに女中にやろうとした真意は何でしょう。

小田——乃木さんを小説に書くために、妹さんに取材させるつもりがあったんだろう。旭川でわたしのところへ来たときにも、蘆花は「私も乃木さんを崇拜しています。」と云って、言外に乃木さんを書きたいということをはめかした。そのあとで「さて、小笠原の妹を……。」と切り出した。

小笠原の妹は旭川にも暫く来て、小笠原が陸大の入学試験準備をする期間、官舎で炊事や身のまわりの世話をやっておった。だから、わたしはよく知っておる。可愛らしい賢い娘であ